

〔鹽尻四十二〕信州淺間山は、昔より焼て、歌にもよめり、今冬享保七壬寅十月十日比より、烟り立し、十三日より大キに焼侍る。神無月廿六日の夜より、東都灰砂ふる。是は山の灰なり、先年富士山焼時の如し、但シ砂は白き方也。是より地鳴動する事夥しとなん、上州沼田城邊の人は、人心地もなく侍りしとかや。賢按、其後又月燒出申候。

東砂降申候。

〔天明集成絲綸錄三十三〕天明三卯年十二月

當秋淺間山燒ニ付、中山道宿々之内砂降宿方、及因窮候ニ付、板橋より鴻巣迄、七ヶ宿、人馬賃錢二割増、熊ヶ谷より輕井澤迄、拾壹ヶ宿者、三割増積。

右者當卯十二月十五日來ル、戌十二月十五日迄、中年七ヶ年之間、增錢請取候様、宿々江申渡候間可被得其意候。

右之趣向々可被相觸候。

十二月

〔好古日錄末〕淺間山

天明三年癸卯七月、信濃國淺間山ノ火坑大ニ燒ク、烏雲天ニ覆ヒ、炎氣空ニ接ス、震響千里、京師ノ人家、窓戸此ガ爲ニ動搖ス、巨巖大石砂土ノ燒ル者、トモニ數里ノ外ニ飄散シ、田畠皆焦土ニ埋ル、火坑土泥ヲ湧出シ、吾妻河、及利根川壅塞シテ、水流絶エ、河邊ニ連ル村落土泥ニ埋ミ、死傷溺死之人類牛馬其數ヲシラズ、

〔翁草百三〕信州淺間燒

嘗聞、天明三癸卯年七月、信州淺間嶽燒の事、六月末頃より其兆有て、七月上旬に至り、夥敷燒出、煙氣東北へ吹覆ひて、信濃路よりは上州の方特に甚し、仍て信濃兩國の荒川よりの洪水、今古未曾有と沙汰せり、去ながら此事古來無きにしも非ず、延寶天和の頃にや、年曆は璇と不考、浩る事有て、